閑田次筆

一

1曽5
22
1

門1曾5
歸22
巻1

帝國圖書館藏

宮内省圖書寮

南田次軍序

ものを乃翁いわく胸ゆきうかれる病
のこのをるうるにたるをにひるをんい乱も
ゆりうにんをしのをよ風ゆをて老をいふ
名のけものほをいを人をりうをもちち
にをりをるうるやをて行をけよ風ふをんん
をを猿のをにひるをなをんをを乎し
けをるもや一七年もちうにひをいをうをる
所へ枝ひくもうを俗をを一七年の四のうをほる

ひるゆこうりにこそ
うりをこそ青柳乃
わをこそ多ひしくもの
うにきこゆるよこれは
庭をおりむにくるとめ
月を寝覚乃
くはわるきゆをすきこそ
にをわるくをものこそ
古をて見こそ

みんなてかりもとめに志るこゝろあり

文化とゝしのころ

もゝ月のもち

男たゝほ樹の毎の資料を誌

# 浜田次筆卷之一

浜田廬蔦蹊著
男直樹伴資規校

## 紀實

○寛政年間和泉國貝塚の人岩橋善兵衛新に望遠鏡を製せしその形八稜圓周圍大抵八九寸長いこゝろに十倍せ政府の日天臺に奮制のものを藏めしゝるとゝなる其他ふきゝゝたゝ善兵衛が製せしところ所そこゝゝとゝで文年夏秋七月廿日橋南露の竜ふんゝゝはゝゝりゝこゝゝゝゝ諸曜を窺ふる

徒南眼の視ゝゝるゝゝゝゝゝ術をゝゝゝゝゝゝ人

のゝゝゝゝゝ特ゝゝ先日を觀ゝゝ四方氣ゝゝゝ毛

のごとく氣ありたに旋る日面黑點五つあり大
小等しからず善き清しまた黑點十餘日を歷て日面
に亘る冬春の間に黑點最多し又或に恍惚の
ごとく梵字のごとくなるもあり甚だ純黑にして何物
といふことを知らず又日毛の氣朝に在ふ旋り夕
はたに旋る卯酉の二時山の頂りこれを觀るに
日輪雞卵ばかり日蝕の氣象大抵這のごとくして市
中に隔てあるごとくなることを知る日弧觀ふこと色新に
燒を出る根のごとく甚麁る所泡沫のごとくなるものあり
又大小一ならず數十相寄る肉眼にて見る所日中黑
睛の所後をもてうるもまた働しく晴し甚象雪
海の紋に似るものの三つとなるまた蠟燭の大サ

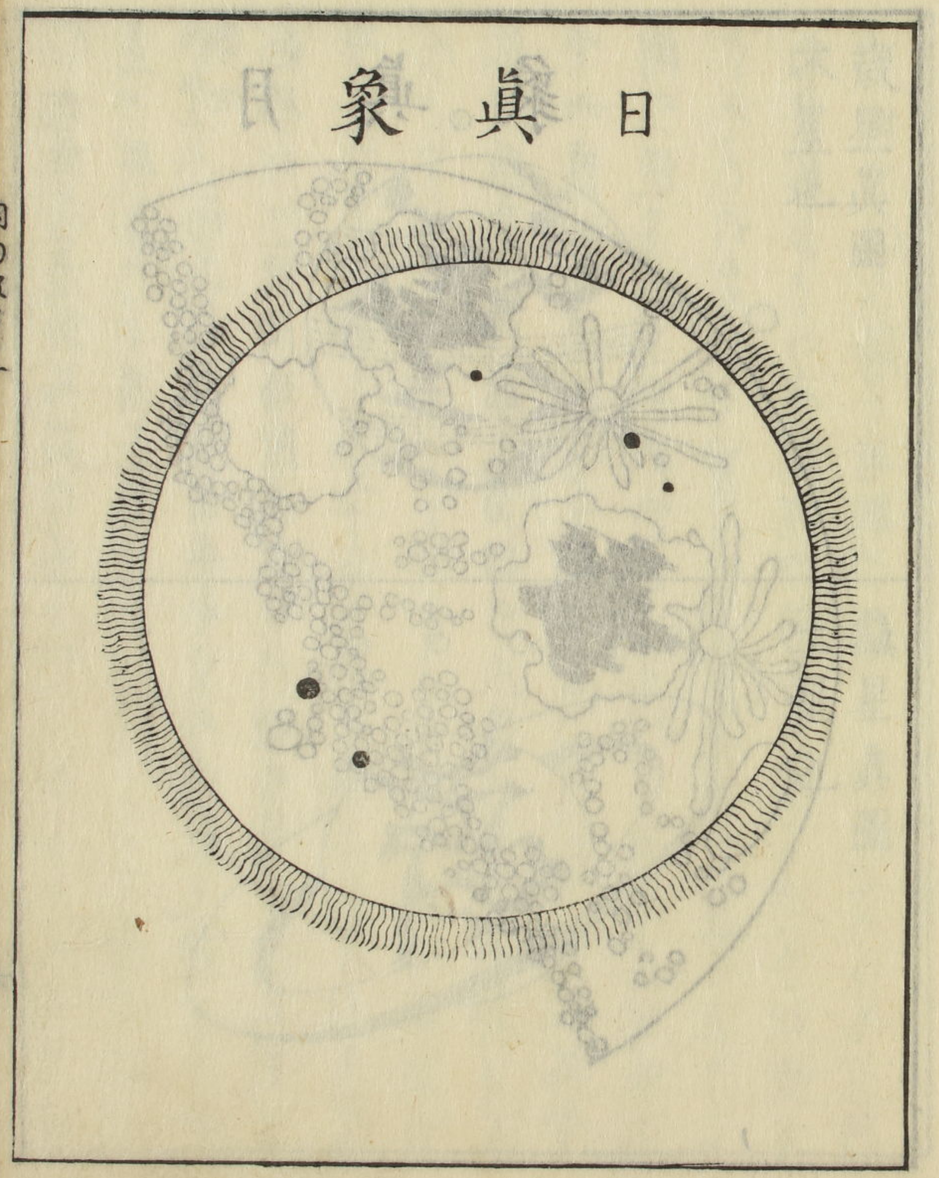
なるもの二つあり極て鮮明にして光芒四方に出ず
甚だ彼泡沫のごとくなるものあまた疎緩甚魄則肉眼
のみにてこれを異ふ星辰をとる正る圓
ふ肉眼の滿月をとるがごとし東遠徼しく
麁なる似るあり器を用ひて子時より房星在西則
東遠徼く麁子時より後星東よりあれ西遠徼麁と
南經謂日光の向背定なれば案星の傍四
小星あり其二右にあり遠ようのごとくなる近者徼
なり其一在左あり近しく矢へ〻し其一つ
ようあり示まだうして矢へ〻し器を用ひ言房よりこん
ふ所四小星の所在背日し但本月十八日の夜よ
て四小星を書てかくる所のごとしまくふこんい

右一つ左二つ上一つ皆明らかにして手へやそし
蓋本星たにうつりく越る天漢星を観る甚象長く
米粒のごとく蓋本星のうち支耳ありて相隔くそ
相附所衡界限あるとろる尾宿の才三星光芒上
にもつへるものと観るそ貫五星相附てそ居りそ三つ
かふり甚二つ上よりあり く所謂光芒なるものふし
尾宿左右のよれ白氣を観るそ貫小星二十三相
亂うふり奎宿の白氣をるそ貫もやうく白氣
北斗の周陽星をうる輔星のかく一星ありそ本
星もまうく二星相接るもの相接の近く周陽星為
最牛宿上の二星相接るものと観る続を用うる
のみいまた闊ちくるの本星も亦一小星傍にある

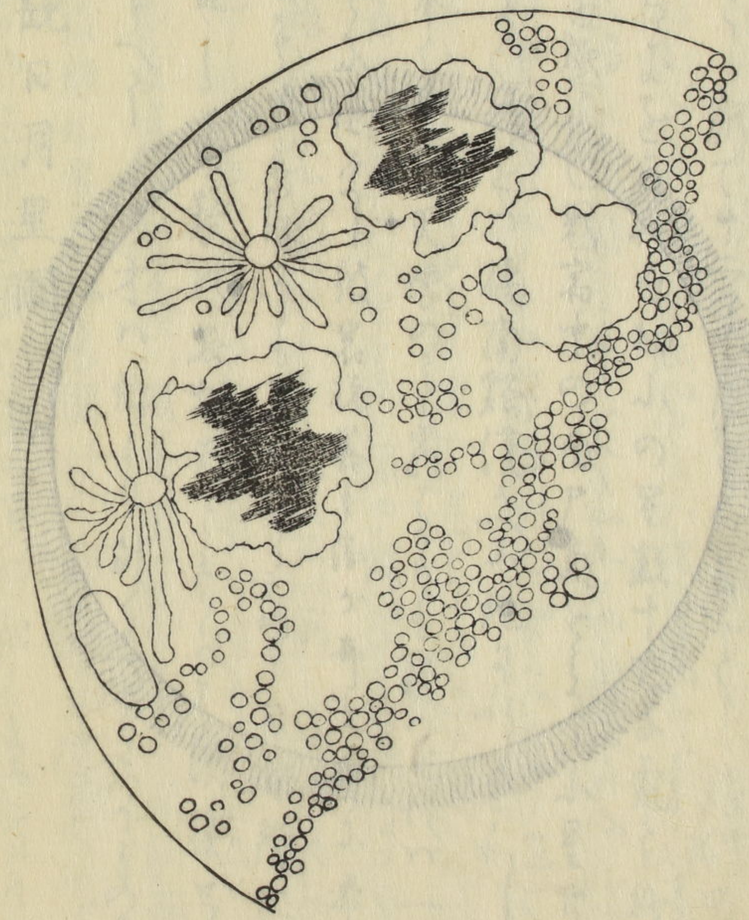
あり下の三星左角の星二星相接るものなり北
極星は四小星これを圍むそ距離遠近齊しく次
長を測高甚一星真に虞を動うかしそ他肉眼を
もてこれを見あるく流伝用う氣を明らかに
しそ数うふ邊ちそ又此度用ひ北七郎のに
十月長を測再ひきうり歳の制せうもそ更に
大うて星をとうるものと称くて氣
もむ紫星をそうふ星面に三等ありて三つ引
の紋のごとし漢星をうふ一つの痕ありて本星
を斜に繞くりそ海左のうい本星のうたのうと
右のうい本星乃下に入るそ海本星のうかに出
るゆゑそ長く米粒ちくうくく後又明年

辰の星同じくこれをうけ次ぎて太白星をとる
にをくし虧(カケ)て十二の月をとるつぎに銀河(アマノガハ)の中
の最(モトモ)白ふをとられて細小の星数十万を氣(ヲヲヤ)て紗雲(シヤモヤクフクロ)
に覆(モルガ)をとし鬼宿中の白尸氣(クシキ)をとる小星廿八
宿をとる北の橋南鷺漢又ふ紀をとりをとり
をとる拳(ア)く手い天譬のをし霧をとりも変つぶれば一言
をいをふ也をて彼宿橋善多衛が奇士寶ふ希代
のをををべ京師をもて七をるもの自鳴鐘に奇
工と書し書裏代器物をとをづをる模せる
たぶりをべて人の才い他より計をべをるものなり

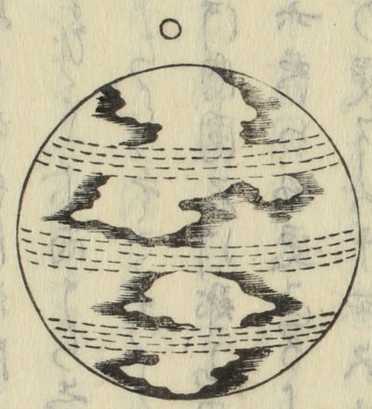
観日月星圖



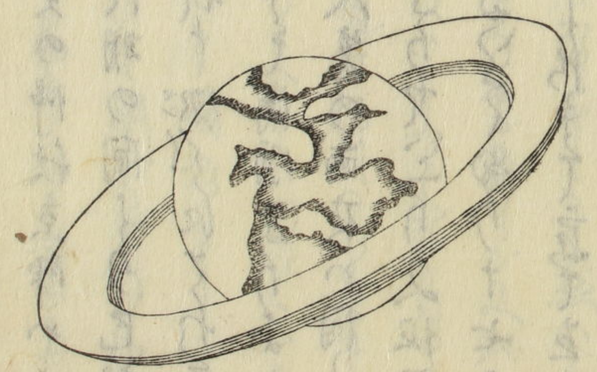
月眞象



歲星眞圖
木星也



鎮星眞圖
土星也



○大典長老對馬國にあるとき時仲秋の月曇晴
京と異なりし有を語られしを菖原詩話に
六如上人著述 記られしづ去年癸亥の仲秋京師にて十四
夜月望夜は雨降十六日は朝の間より巳刻よ
りしばらく小雨うちそそぎたれて清
明なりよ然るに河内國石川郡山田村の人先の兩夜に同じく
十六夜にも更るより晴なりしかるに但馬豐
岡の便りに十四又六ふるくなり十七夜始
てそれなりと云しかるに三ヶ日まで立まち
の月曇りて八幡の白をとるなりうれ對馬
に地方遠ふ隔て朔望異なるもなほ

ほそもつべきを河内にちなく但馬にて
もそのいつくだれ同もあるべしを聞くに
かくづりの雲氣のくもりたるのひとしきを無いうぎ
なりものなり右は此夏ひろう書記ゆえ此仲秋
望日晝用いるなりて今年はいうなりしに
此夜薄暮より空こころよく晴明なりもてたる
なりしを江戸橋千蔭よりの文にいまこの夜雲
なりてうすくなりしを晴めるしなり
ほれいこころみに矣ふりかへりて嘗るなりほれに
なれもこれもの月ちつやめてそなりほなもなせと
口ずさびしなりしなりし
○新井白石先生伝奉仕久間洞岩翁ふ贈られし

手簡数十通〈俗牘也〉おもしろき話ども多かりが其中に
某乃やりしの状は手簡に「中秋なとのことも年来
常に来賞は一二輩を除は定りたるもなくなりし
当年に限りて彼常に来りし人も遠詩を被き
かくなれに〈此は白石翁宅を郊にうつされ遠くなり〉出て来りし人当
年まさに三十年一夕も欠さしを悦びぬしるし
酒後は和韻もなりける情字の韻一句を千里郎
外中秋色三十年来故意情と申十四字書てわし
候ふりは当状の晴も五三年にこれあふさとゆゑ
右のごとくかもはまれとされは八月廿日の書みて其
後酒宴よりの返翰ありしなるべし十一月廿日の
再答に「中秋夜甚坊隠懐てうし如作なく

説て中秋は万里一晴百里一陰とやしるしたりし
無稽（カンガヘナキ）の論となすべくは其意何ぞの詩なりし通後の
佳作もなくしゆゑ不能二其義一は中男手紙に一聯八一
聯のまうちあとなもなくめでなく抜来事足し
ひかんとてこれも一興に備へて紀満郎花落林風多
を重陽の例となるべし
右の書簡を集めたるものは天甲子の春吉備
津の人子借りて去秋今秋乃陰晴等しゆゑ
同し類なれはなりとて去年なき中秋の賞一
聯に情思上めてまた来年是ならんとなれも
面白きことなれ詩人も歌人も情意なきにあらね
てう海へ出まれはなぞも出来作文くるしくも

あるこたりあにもろひ花をあそび酒をと汲
時々詩絶いふふをどこと人の作しある卿乃作
られし九義等をもろひ勝地をいるかたをてそ
新をとをこと年出んとしまくらびたを氣色を意をしめ
みけい新をあびこそてあひてあひてきこと
くるものありとたんいてとりたる所を所をあり
又門北自然解と別しく人乃話を儀同三司實陰
たのこと年をくるれ田の題を
洞雲を神代まをてふふ田ををねををきりけ
ををきまりとあるい家をまた如画をれ清流の庵家を
ををもをを社のあをを音をわ西雲を後ぎをしうをも
家邸も手をれて出をきりきの人外し 桜をり 捌

あるを爛漫第一をもしをををををはをををる
なをををををて抑干ををををを今く社作緑のを
しをく実景ををんををををめをををををしをの
ををれしなのれまをを社作に若をををのををなり
しをを自の一解を引まをてんををををふ緑を
○西園寺の園に一老婆船を天氣ををををを
社のをををあをををば大ふ穢て流華へはをまり
てをれををのををををををををををををれい
いをををあをを加園をを社作に服
常ををる山ありをををををををををを氣
をの手ををゆををあをををををををををを
しく若ををををにわをををををををををを

○夕月乃形ふしもて晴るとはものに人のこゝろ
をうて大やうたがつどひてを神人はそなみもて
夕月の象に宮まれるものゝ多くゝ中ゝ
中ゝ三柳の能舞隠羽とかゝふ如鬼ヶ形雨
多風月ゆゑ作兎不求自下とゝ古語を出り越
ゝ々のつゝわよ同し所論より後據なり
○夜同暦をゝゝをゝれいゝ人ゝ中古
いまゝ多ゝし代ゝもゝ説ハゝゝ菜花
物語ふ東三條兼家ゝ一條天皇の東宮ふゝを
ゝよつきて圓融帝の内勅ゝて祈ふゝをゝ
同女御殿にものゝ宮きゝをゝゝ燈火ゝ
ゝゝゝゝ覧ゝて所ゝふ如ゝんいのゝ乃

使ゝてゝたゝゝゝゝゝゝ
○々の暦乃ゝ殿に同同ゝゝ記ゝゝゝを中殿ゝ
ゝゝなゝゝゝ以前の暦ゝハ支干ハ並の
ゝゝゝゝゝゝ々のゝ殿ゝ中殿にゝゝゝ
ゝゝ乃若ゝゝに老人乃話ゝゝ
○百人録とゝ書ふ月ハ東方卯の影ゝゝゝハは
西方酉の新ゝゝゝゝ兎ゝ鳥を画ゝゝゝ
龍竹廬代筆記ゝゝ毛ゝて金烏玉兎のゝ
白なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ百人録ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
代ゝゝゝ
○ゝゝ壬戌のゝゝ七月晦日上京今出川殿に一道

乃暴風屋を壊り天井高き堂宇ども吹ちぎりて取散らし終に
帳一間ばかりなる屋根をもまくり取散らし終に
みな障子まで田中村より虎山の西麓みなり
て止まりしとぞ蛇の巻るなるべきに一束
も降らざりしかば羊角風とぞいふなりこれ国土
は折しもあるべきかとて一用連と号くとぞ又別に
一種の風あり俗に四月の風とぞいふ
高しかねど外面にあるものの殃をなして製造
ぐく病つくるなり治ぜざれば死にもなるべしとぞ
是はあるべきかとて此の子の
やうに産婦の産の時に産子の
なくうち倒れたりしたてさまくふ抱へさすけ
正気に復して後ならねば頬のわたり刀もて切る
ぐく病付しなんとぞ即これをくべし又是につい
さてある人の話に紀国大鹿村の弘教寺のふ僧
この風あるあるりて悩ましに古瓶を霜みて付
しうば血ちぬりたるを霜みて付るとぞ又
よりあるもうねて少ばかりこれを現後をりて
紀甲斐の遠ちまでい窓明を陸子なども瓶みて付る
のわれば祈風ならぬこうりたて其わりみまは
風神太刀を持ていつるうまくぐちて殖ちてを
うなるうちに祈るの呪詛をこれまわるうれは
祈に陸あり

○辛酉のとし極月より壬戌の正月ふかくまで長崎ふ疫邪流行せり門ふ遊ぶ人町ごとふ事あり
ア一周ふ○ろ同様ふ病ふるものはあれども
ふたりは阿蘭陀人より傳へしもの去年流行せ
しアヒホンとの外寄人より生ずるもの又往年還
人流行せりしより風邪流行せし例なりときこゆ
ふん此邪氣長崎より九州を往きはひふふ言ふ
みぢ此間一遍なり京い二月のはじめ
三月はじめにみぢび毎家毎人病むものあり
迫にわるものもあれども風邪ふ似たれども一
種の疫氣(エキキ)なりと異文(ユウカ)ふ過疫論ふ出る合
ものも多し微疫をもて薬ふ速ふ効を

えるものとなれども中にきい邪を病むものい必
被のうちふ毛おりといふそれい脇毛の落るなり
んと解る人もなりしらず手ふ迫ふの親族の者
たるものうちふ落ものもを一ものづつ家
の内ふまのぶも病ものとなりをもとふ
皆みのがれおるひい二三日ものもあり
ひきい傷寒尾張の国ふもなりそれこそも同じ
ものもあり手ふ歯ふ病ものいけやくふ
ものも少ざりしうばんもつらぶいでをくん寒人よ
ものもいくしゆるものもなぜりもの必被の中
より探出るものも辛苦なり定性をもてべ論ずべし
○壬戌の春尾山の花ものあるものもあるいふ

うたてうたてふるれば花の色もほどろつつぐるて
損ぜしめたりときこしに吉野も同じ所にして
と其外の所も拜殿して後とこゝで参らるゝといふで
下ゲ開田ゑれ庭よる数株ありて遠きも近きも例
にうつる色もなくすやうりゑ所めるもぶごりきゝ
をのゝ易て拜ふりしうもし花乃ありきたつきて
地祝をなをしうさらぐうぶ
○前編に同名異所のあるこゝろ又歌名所
をくゝくゝの地乃稱異なるもあまたあるべし祇
園の浦い出雲祇の濱い出羽祇の濱い花前祇の
濱い陸奥と諸名所集る又京乃山元の名所
集ひい出羽とうつを契沖の考へい出雲國べしとて

其國の風土記に郡家正南二十三里とゝ明記を
引る京の社京乃濱い同所みて伊勢と室い紀國
室浦い播磨室生い大和室山い伊勢みて一志の
室郡とゝ室積い周防後頼朝花の所に花前
竈山をとゝ合さわれ明で無所の順路みて竈を
るてゝおれど疑をて證空上人乃遊女をとゝ
ちゝ室戸い土佐と世の室戸ときけどゝふ弘
佐大師の所おれば證空上人のとふ泥ぞる人も
おるべられどうきて紀をゝ又同國に室津とゝ所去
佐日記にゝもこれも前の
○室のやゝ名にも煙たゝくの所ふきゝ西ゝうふ

其所を貝原翁の日光の記乃附錄に金崎としつゝ
より一里半ばかり總社村より林のうちに總社
明神のやしろあり是下野國の總社なり其前に室
の八嶋あり小高のごとくなるものにかりて其廻り
いけにして池のごとし今は水なし嶋の大きさいつも方
二間半ばかり杉おしまなり此嶋の廻りの池に
是水氣烟れごとくなるを賞しまうし其村の人
あまたに問まうふ今は水なほ少し煙もなしとぞ
是と記さるゝ所なほ此國の古乃一說をかたり
これい一所にあらずとぞ侍る所八村俱に都賀郡
なりて鯉が嶋高嶋萩嶋大川島卒嶋曲の嶋沖乃嶋
仲の嶋かしとぞいづれも見たることなきゆゑん

きゝまうした記をたゞ煙氏をゝ水氣氏又里の
煙氏ゝ氏室とゝ又是一所なるべし總社村の古名
氏都賀郡の所ゝ氏つゝなるべし那須ゝ室ゝ又
總名なりしかも弁へべし室ゝ又名も煙ゝあり
○ゝゝなるべし苗氏稱号なれば大うゝ人里の
法名なり和田の親族に朝比奈の三郎ゝ又いく人
ゝ共名をたれりこは和名抄安房國の那名に
朝夷と書ゝあるべしゝゝ氏領なれ
ゝ

○前編ゝ三河國八橋いかの所ふるべゝ大竹大路
とゝ云る人の說を挙しふ三河人芝田氏うけがゝ順路
にゝりてまゝゝかの舊跡なり彼大井氏いゝ辛な

ものも其説特ぐるたるべきも多くてこゝり

○二村山契沖師の勝地吐懐篇に曰和名抄ふ尾張国山田郡両村布多良とあるふるわゝこゝにあるべきもまた何とあるべきに以上

手按ずるふ詞華集橘融元の序乃言書に武蔵の国より登仕るべきこゝり三河のふ二郡山乃取茶を

のみ[illegible]ゆ例の都人の国をおもふ[illegible]

るなるべくれど和名抄乃慥なるふ侍べきにあらず

に其辛右の意田氏きこゝりて三河の国を名づけ

つゝ此事をたづねに今三河国藤河の東より

山中賀茂ちとして作宗の寺乃山を二郡ちといふ

非なり二村山は尾張ふ池をうれ所謂山田郡今

の絶て愛知春日二郡ふ分隷なれい両村も手入べ

ばふ[illegible]れど張州府志といふ書国君氏命ふよ

ゝ編集せ中の説此書字をそ得べし鳴海

より二里余東々方街道ふりわれ左に入て浦柳

といふ邑即二村の々々大なる里なり此里の

西の所二郡ふ東は尾張三河の境なれ

とをりのわれ古くも聞て三河ふ[illegible]

古像の石仏あり[illegible]折ふて残る半身に大同弘

年の銘ふ[illegible]の宮道の微とぞ[illegible]

鳴海ふ池鯉鮒ふ向ふ入海ふ[illegible]

ばゝ通ゝ[illegible]ねば東氏山へ[illegible]

非駅駑を経

て八橋の里人は今の八橋村はなほのこりし順路なれば吳服ヶ橋の
明白なれ今は入海埋れて道も改わり仁治
の光明記明々白々なれ脫に為綱が辨ぞにてなし路の
はつぐもうをもとうて雪海のうち波を二もつ
ふうつるうみてあうとつるうもつげ二もつるのかれぐと
明月まは波をしくあるとあり此山遠く海をとりて京
色葉さらくまたるみ寺にあくりたぐ芭田氏も
もりてもつ者を彼府あるあつてかくれ也
○名山大河を探ることなるもの大史公ぐ芭蕉
みちゝ性しといつべしられば不二峯たぐふ登る
仁儒士のねもるし物じも法同もとりつて
てをりうれ者といつうと清とれうも

とうとなしとて登るはまぐ国ぞ東ごろふ登り
て石室に息ひ雪れけを喫り饒完をのぐたゝ砂
のかふわるい何乃蓋ぞといい侵蓑をぬむ平人の
情し女めりた情ぐくたぐ清しもうと一概の
事し都良香の富士の記も登ぬるふいあるぬ亭を
とゝ一茸をとうもとぐこうぬぐ秋儀
玉山登山して遠近の京を連ねられいえうて
悪ぐりう又石井海雨ぐ自登ゝ考論ぐうも蓋あ
もぐこうふ屋く其視ふ日富士は駿河伊豆相模甲
斐四州ふ亘ゝうり宋景濂う日東曲の第三首此
嶽を賦して播根直壓三州間と作りしい味盡又
中叔舟ぐ海東諸国記に日本富士山高四十里四

時有雪といふ此高サ四十里とはいへども十余里を於せり甲州吉田口より直に絶頂に登ること三百五十七町十三間といへり又明ノ謝肇淛曰莫高峨眉莫秀於天都莫険於太華莫大於終南莫奇於金山莫巧於武夷其它履行而已。吾不二峯一山にして其半をとゞめたり於其美麗なる事面向不背の気状世に並びなしされば文人雅士一度此山を見んことをねがはざるはなしとぞ　中略　麓より樹繁き許を離るゝ事一合二合といふ凡山に出れて嶺るゝ頻なりし其の脚麓へなびれて雷鳴足下に響き降音も於甚しされど中天は月光玲瓏として下踐の雲なく碧瑠璃のごとく時維七月望の夜な



れば彼唐帝の月宮に遊びたまふもかくやと思ふ星の光ちらく空中に耀きて手にとるがごとくなれども凡山よりこゝは里数をしるせし五合より以上には石室を設けて飲食を鬻ぎ氷を瀝て湯として渇を助しむ八合の室中に暫憩ひ且飲且食ひ火に暖まりて寒を拒ぎ労を休らふにつかれの眠きざして次時を移すに室主みだりに夜明べくもなし早く出られよといふ声に驚て又登るに此より甚だ嶮難にして大岩峙ち道危く若一歩をあやまらば環を盤に轉さるがごとくならん恐べし漸る絶頂をかうくくれど傘坂閑きし剣の刃の稜を渡へるがごとくみおろせば岩角を掴み枝に倚て休み意を静めて気をおさめて歩め

ども呼吸喘ぎくるしみて胸とひしめき合ふやうにて
いふるる剛雪達磨のごとくなれども一息ふ三歩を進むことあ
たはず冥もこと胸塞り呼吸を九合
とりつくろふことに先達たる御来迎をうけたまはるべし
やがてこゝに明るうやがて東方をちらめく初めに一番乃
白雲空中に引つゝるとなれば忽雲動て春ぐごとく
紫青紅黄の彩雲(イロトリノクモ)霞(ダイヒ)を其麗しきこと比べきもなし
そは其ころ所服を八ふにかゝる其時傘(ヒガサ)の薄
墨をとりて月輪を張ごとくふ仰るもの次々に進
昇る中ふ朦朧(モウロウ)と人の影のごとくなれども是を来
迎と稱をなして此圓鏡のごとくなる次第にたゝ昇る
也離るとなれども然るとて吹消ごとく消かたり



車輪のごとく紅日たゝ昇るこれを対ふひ
く速くして一世界こゝふ明らかに脱うて一反半登
るべし光輝宇宙ふきらきく人の眼を射く再びもとの
ごとくしたゝ此来迎といふものやはり異国ありて
或は前後面を常とし日の長短朔望若い星晴ふる
ごとけれども雲霧ふ傑(ケツレツ)なる葱嶺(ソウレイ)なれども登山の者
よりも強て精神恍惚(コウコツ)として真を視ることかたれ
ども種々の異説もあれども近世印行せる小説に富士山上
せるもの来迎をなしたりと忘(モノワス)れたる是日の暮乃
中ふ此方の影うつりてんゆるく恍(ホノ)て此方の人甚(ウナブチ)
ごとの佛も同じく甚頭をこれをもく澄ましてこゝ
うれい理学類篇ふこゝる人城肩山より至る五更の初ふ

とわれば白氣を數既うて圓光有て鏡のごゝし其中に
佛あり近も其人手を以て頭巾を包むに白い光中
の佛もまた頭巾を包むこれとも見人の新たなる
ことを知る則彼山中一氣あり日のあらゝ出るる
照らるる時は其影圓カうて人影映ぢること佛のごゝし
といふ又潛確類書にも大蓬山の象王峯にのぞれば
大經百丈の黑影の佛像に彷彿ありあり翠雲初て
發見日乃出る頃ゝなることあり今ゝ富士の
來迎といふも已ゞ影のうつることを臆說せるこゝ彼國の
二峯い眼のあたりにみゝに似ゝ非ふるあ
る彼二峯はまことふ山中の一氣日光に映じてうく
ゝなるべきたゝみゝ阿波の灌頂滝と山の勝妙

滝の類ひるん富士の日出をうるい眼下の海中に
出て更る山氣の遮映るものゝ元日月の照らす
ゝ物あれば其影背にうつる常理こゝうゝを日東
方に出ることうる人のうゝけも亦東にうつるべき理い決て
なるべし異邦に又所の日出の圓鏡い中ふ陰氣
の隔ある也人影もうつるべし富嶽にうるゝて大
に異しゝ雜ゝべし四乃人の彌陀の來迎とうゝと
もこと儒生たゝ懼ゝ佛とこゝば理非を相忘るゝ
一概ゝ逆濫ゝんとゝ知ゝ初ゝあゝ況ゝもゝ氣出ゝと
ゝりゝる佛者黃冠の類ひ信不信ゝりゝ來迎とな
もゝの異なるやうふこゝも多ゝべし心氣虛弱の人い
ゝ酔ひ忙ゝ始ゝと考ゝべゝも多ゝべし

以上元文年間夢見後ろくを得ざるを恐れ少しも要ところを次ぎ書いしもそなぐど秋玉山の記に著せる日出の景大同小異是亦に所謂時ふりて たゞゝし曰六洲六合を以上不毛ゝ元を而嘲曰小縣度。是時衆星皆没東顧蒼茫同有物若大炬火光ゝ有光動揺不定問之石室人則曰是啓明也此星上文鯨東海始見朱碧相混青黄逆拂紅光一常欲鑾余調靈曜將躍踞石注視久之既而諸彩皆滅枝桑无景衆疑焉須臾山趾深黑中忽見赤色石空人指曰是日出也其初升如車蓋稍変為帝者金冠玉衣而立之状使人不覺興敬然端嚴也須更変為鏡容為重輪為鎔銀旋轉不已欲合欲離暈凝胭脂色俄而光芒乱躍金線百道一輪吐千輪後輪層出輪々相及飛到我前為珠璣為瑠璃雜而下者不知其數以手掬紛々隨地豈所謂日華者邪未知泰山日觀之奇与此果如何也下略日出の趣彼是を

○讃岐由佐邑の人菊池武矩はゝくゝの記行に紀伊国濱男とゝ所の近きに耳塚あり神功皇后三韓を討たまひし時其国人の馘を埋ひたるなりゝ所なりと足本朝馘塚のたゞうつゝ此後源義家羽奥州の戦に打勝河内国に馘塚と築ふ耳納を建らる是第二度し豊臣公京大佛ふ耳塚を築うれしの第三度し耳塚いと古氏傳所謂京觀をりとゝ心りの

○同し記に香椎廟に元亮物に云承保四年香椎

宮田孫公卿宣云。伴社或稱神功皇后廟。或稱仲哀
天皇廟資綱云仲哀天皇也武矩云。日本紀第八曰
仲哀天皇以八年正月到灘縣因張橿日宮。云云九
年春二月丁未崩。とゝゆゑ社頭御櫃をうけ雅の
木などもひあてそれい資綱の說に從へ爲よ元貝原先
生の神功皇后と定るは別ふ據あるゝ但し陵と廟
と所異なる例るれいづれも定がたきこゝなり
○江戸乃人去ちかゝることふなりて出羽へ雪降よりに
逃さりし道の記即雪れ去道て笠しをちかりとめ
づらしたることなり前より名を記さぬ行人こゝに
ちかゝるの所ゑてゆうに佐ちりうもやたるにな
りしものなり天明八年の霜月雪を降きてしからう

しての所たるり月九年の二月までのこゝもとうちりを
けちこゝ立ちり雪ふりつゝちちりゝ分ゆ旅乃未いまよ
ちゝ所ちへ八をゝたゆきうりし道をわたゝかゝるれゝそ
年ハ三月に出ちて霜月みうりゆるまにたゝうもゝ
ゆるしゝゝちゝハそ深き雪の旅路ふちりひ立ちゝと人々
たゝりこゝばゝれも人やちゝ旅ちれこゝゝと沉り
ちりに何の關こもちりさ為雪白うゆりゝる
月ゝ雪ゝちりゝ行ふんまはつゆきのしゝ行乃開
や書しちり来て雪ふ芝ゝ所ちゝむも身の毛ゝ
ゝちゝゝと衣里のかちゝぬわゝき人よ芝ゝゝれいかう
くゝあきゝもちりとちゝ也ゝゝてゝゝふめきゝゝと
関ゝゝうゝ和にやゝ風ちわゝて所ちゝゝ所に雪まゝゝろまゝ

あまたゝび出たれは山も里も雪白く降したり
来るこゝろさんと定めつれど風の音にふきて明そて
さるほどに人く（入足イ）より荒ける風たちさわぎ降る雪
いと深く成つゝそのかたびより十町余りも来つるに
やうやく其所の庭雪ふりくらはるゝとくもされど坂くし
今はかたちて見る此度近し其わかれのりもなとなげく
追ゆかんといへばなんぞべきあまたまうたらはるごわりくつ
ほうどなつるあむ前に雪こと深くしてあまるびた
ふれなんとゝ申すとなべたなけられてあまあべくうき
とく浪あし滑津（ナメツ）のうちやにつることよりなくだまき
は雪ともふかくして馬もかならず沢にあるもあるひかう
ぎをいはそりをするみちてのるに（俗云路ヲ〜ノイフ）げさとがまたつけて

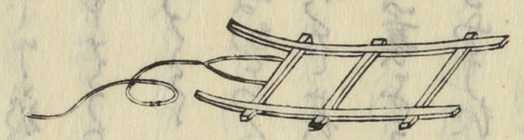
うちんに負せ〜は風のあつひてハ雪吹（フブキ）に堪へられんやうなる
しとてそれにうしろがるのまつはとこの馬の負まつる雨
奥頭に引つゞき引きゆく山路ぞにくなる中に踏
はまる道一筋とさめてきる風ぞうしくはちて
ふりくる雪を吹まきてふくらちくもえりやうたられは
中しうしろ方に風をうけられ来りなどもんやさし
雨奥引あげしもをえるあてはうわ角さ山楽重て
なくまこ手るゆとる追分をとくぞり橋をとうりさて
言ふ所に引のぼる坂ぐれ絆（ナワ）ふくりかゝるゝ見だめる
を綱引并しつゝあそりあハ蒲団（フトン）を敷て乗るも
綱つゝ結（ユ）ひはあられけるやうにあれとはるふたゝ
且沢かは部にきあうづけるかちんか遠さ跡にたくれて雪吹（フブキ）

にいたりたる所ありしうへにて韓昌黎が馬すゝまず
まことにいつる藍関の道もかくやとおもはれて雪なほふかゝる
に、いとゞさむくもまた衰なり
同じこゝろもてある人々このあたりより山路をとる雪ふかき汝
砺波の駅ふりいてこゝより中のみちを三里ときこゆ下
新くらしうみさんとてありてりごころあらずいふものとすく
めでしのさつくわれは橇なんどいふもの乃うちふみわりてひろく
すゝみがたにくるしみければいとあやうし
此度雪中の辛苦をたへつゞけられし中にも殊にあはれなる事は
をりまたありて金沢より及位 及位とのぞきて山やぼうしに
ひとりんとするにこゝろづきあるさとりうる人待つけしうち
やどかりがたきしといふわれどいまいせんつかふぞありける

も日高し及位みなとまり院内へ入らんに便よろし
だしはさつかいきつくにあれば夜の間のうつきもよろし
ろめしとてたいそうめやらんかさて山の中
をとる所ってゆくよそも跡つもなくつけき山路より
こゝろえうるとのゝ庭あたまでひ雪にさらさるゝをとう
うしてひれ深つくるゝ夕日花やか晴られいてより
ありてゆくに山深のたらひけるにほどなくうげかれ雪
そのうちに人々てつまりてきて鄙べられとて道にふ
まふこひつくろして所さがしとりね多くかよふ宮で
うち人の顔もかはれど深くかゝらんつけたり二里ある
つゝまれつゝとてに家くる音たてつるつまりとも鳥
てあとふをやけどこの宿人顔にありあつといふことは

背負荷(ショイニ)の体

橇(ソリノ)圖



加籠橇圖(カゴソリノヅ)

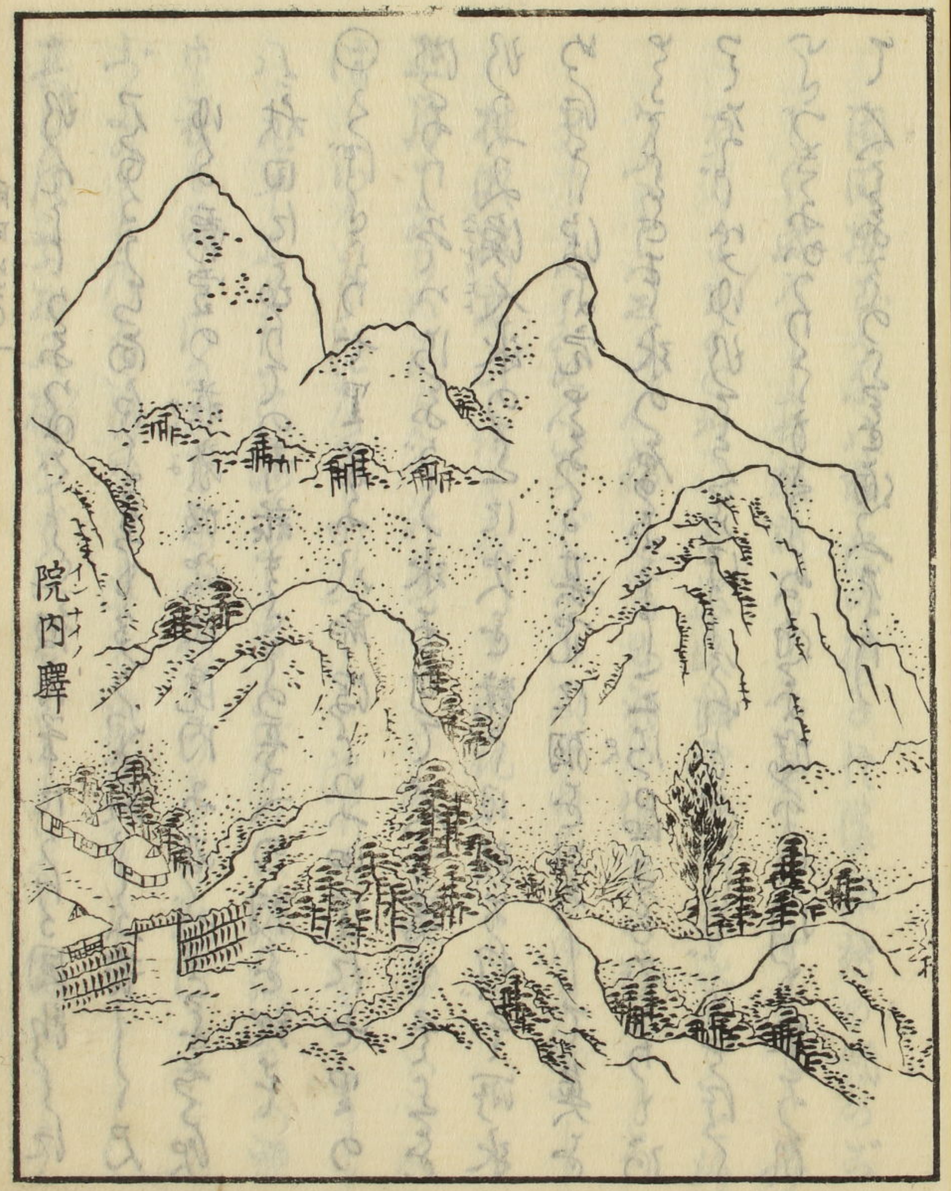
此荘根坂はこうげきまでいハ十八丁あるを山てうは熊
んとうこゝ毛ものあるよりはる鑑火の奥さて〜火をう
きわすりはまもて下永接くつ〜そちびく雪のうに人の
跡つけうる跡者をうりふあるなを跡をてをめ形たなれ
ゆをこやう〜をくをれわをさをれつ〜をあををくを
ゆがくをりぬめちく人々い負まあををて細んあれ奥子
きの食をあわで其香塩ごく行をんれんどをみをを
をわををうる養ををををををよをて腰よ弦うけ
をわよ屋うをうやうにう負いをごみをまをきを
をうをみ紙ちく負めわをめちく人いて列てをのやうふを
をゆ〜をふあ〜めちくん〜雪ちを捧げうふあ〜なづ
をてわ〜ふをいうわをを負をるめちく人めをい道をうぐ

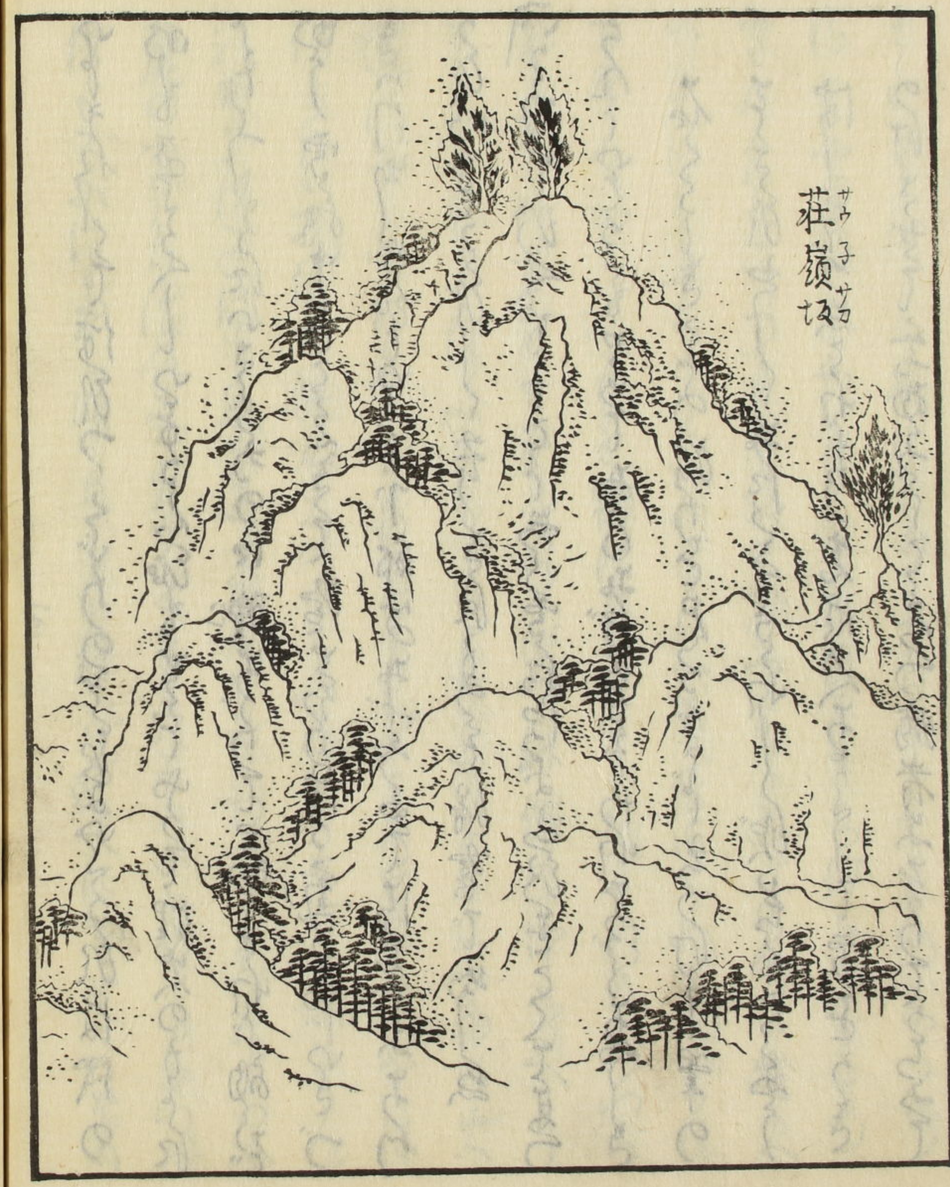
ドをを〜ゆ〜わ〜ををしを火をまちををりをうちををを
過をいををのぐるゆるまく作をの雪代深風
をたををうふやうにをうい道ををの負をあやうにお
をあわでいを道接くをりを負ををを吾腕雪をを
摩をるくをりをゆをを雪をあれがをうれをあをしく
ををうよ時の同よもちひぶりの大きをるをありぬをして
掃れををゆけど十同手をるわをりをををを同をを
きあを花の先より腰のをりまをて冷ををりを戦
をの〜き塩ぐく若〜ををををんをぐをを〜さ決ぐふ雪をを
をわで星の光きをををわを作をををこはををあく〜ものを
ゆ白りをびををりいぐやのるあをををてぐををよあくぐ
きを〜つきをしをを〜をんをを負べををををををけをををを

まさしう見て語りし家にいたりてかたらんとせしがみなうなづ
けれ、やがてあやしとてともしびをうちけちぬるよりの
雪の白さ一トつゞきていづこもかはらずあかし。燈火
の光にくらべてそれはあまりに今は一方もゆかしがたくれそれに
せまりたれば時にうち人々手を額にあてゝまどひさわぎたりわれ
まして竹生嶋もおもひやらる唯神佛の御名をとなへつゝ
まちをしてとかくはかなくすぐすほどにおもひなる東の方の火
遠にみえかくれつゝやがてまちにありしがそのせんなりしかは
はらかぞ及位（ノゾキ）の驛もあのふもとに見ゆるらむげにふかなん
八町ばかりはる也ちかしといふをいよゆびんなきわざとうらみつゝいふ
麓の方よりはれ來たりてくまなく見えありいろふかくとりてかくれば
はるばるふけはるかに流れかし下部どもが迎へにきたるなり



いとうれしくて侍りつくぶりのつゞきより見れば戌の
時も過ぬべしいまある魂もせんとやがて埋火のもとに
よりつどひたるにいさゝかのに臆（こ）ありてあつくすれど物ぞ
あらず雪の中をとほくきて疲をおもはする氣（け）もやいさゝ
きへ門出しけんといひつゝ下部等みなよろこびてはかゞふあり
それ時もとうびしく思ひきにこのみて得食で物しぬ
「いふみてもくもそこで書き雪の深よむ沓をこへて來つ
らんといふもせめて爲乃身だにあらぬかはれたゞふるあやしき
をくらしきことの限りをしくるがごとくに書つけし筆の
すさびもしくみ侍りてうれし。燈もちかくてかゝり
はしとゞめこれより先は人あまたして雪をさらせ
のけさせて來るこころつ病者みなよりてうちふして


院内驛


荘嶺坂

ひんこうふるぐ〳〵彼自筆にうける図所〳〵に
あるうち面白きもの多うれど略〻こゝに長〻しく
ゆる春雪の莊歌(サウヨウ)次に院内みぬぶ〻〻〻次
秋田にゐりての奇旅〻〻〻の事を記す
○こゝぐ〻より七里西八郎潟いふ四里に七里の
潟ありそいにふぐ〻氷ありて人も馬もそこを
ひらく人(スナドリヒト)漁人氷のこに火を焼き日ひあれば氷
めりて潟ふ完〻〻みる其穴に網をおろして魚を
とる〻〻〻氷の厚のよ〻こ尺ばかりもあり
こなどゆめ〻〻〻ほ〻れど道乃ぐ〻もこ〻
ひ〻づきふかり〻〻〻ぐ〻の道ふ潟ゆの川も氷あり
て人〻ふ〻のこを通ふ〻り



雨田按ずるに八郎潟の作る作濃新の湖のぶ
〻く成ぐ〻芸藝筋乃う子い昔より有るもこ子
なく〻いふを此八郎潟又潟ゆの川も氷のことを
うふ〻〻いふる人婦し昔出れい娘夫の始ふ〻
〻〻うぐ〻〻〻人なぐゆも及ばれぐるゆ為潟ぐ〻
村例特等の絵〻〻〻れもみ記ふ同し
正月まえ月れ〻〻〻の林参る〻〻〻町ぐ〻にわ〻〻〻二人
ぼ〻〻〻ぐ〻〻〻たて〻〻〻町づ〻〻〻ふ〻〻〻童の〻〻〻
八九十あもを〻〻〻ふ〻〻〻て〻〻〻ぶ〻〻〻れ新後なる頭
中衣も同〻〻〻ふ〻て赤ふ袴をつ手み秋ぐ〻て〻〻
ぶふの〻〻〻ふて〻〻〻ぐ〻〻〻ふ〻〻〻ふ〻〻〻ふ〻〻〻
長り〻〻〻長あ又橇(ソリ)なぐ〻〻〻ぐ〻〻〻潟ふ〻〻〻

のぼりはうちくの家なども引ものを酒肴まう
け新しき沓はりはづしてちとづゝあつらへこゝにまた
うゑくゝとして十四日の雪を集めて竈を造り門松をは
なして燒あげらるゝ火を後やゝあたゝまりて西のかどを
ちらしちりきんの家うちも投入てことゞゝなりしてさるゝ
の、しる後を年なづたさゝあげてうちつゝるひちづゝい夜
乃ほうげてこさるれもうゝ中くやうつりてゞゝ四
ぶたちとたゝふはじけられば年ちりこちほて十四日のよひ
い雪もまうくゝありてひとり雪の竈は四ぶとゝふ一さろ
ちり家ちり高うちもを囲ゝはるり四日いうまく
ちりのまくいでゝ稼金をるへとてるも人共四ふ入孤
あをとて角ふはくりをづのとんゝ雪をしゝひるの

ふぶりいとあやゝきさらだよとてはるとてあづきの粥
ちゝちゝちゝたんかんるうるぬこちちゝう
夜つよ四ゆあわるゝはゝとてか面をとれば雪一さう中
はちりゆちゝの妻はけさいゝ寒きに雪保てうゝゞて
まゝゝせんとて雪をまろめてゝの子けゞゝ三月ちこめ
巖の郭を会ゝゝ物補に氣をわふ雪をまろゞうけ
ちわいはゝまれてまちひのぶゝゝちりゆやってだぎり湯
の中に入れば冬ゝのひをけふ暖入ゝちゝ著
ゝゝ中ゝつゝゝゞがちつゝよゆものゝ中ちりけちゝづゝくゝて
食ざれいあやまちて去を進ゝたゞらう決ゝゝゞ決めづ
き湖裏なれば写ゝ去決けかいろゝの図ゝもあゞ古のゝハ煙り
なれいちふ器く旅ゝを畫ゝ一原いゝゝやく笑ゝてまき
写決ゝゞうふ旅乃中ゝゞけをれることを祈もひめゞゝゞゞ

雪八竈




とづのと次





俵の次

意はひのもちつけふ馬場のうちくるのすがれて物さ
ふ友どもなく、まぶもん遠よりおびたゞしく家内
さる母いとこ子のうりもやうとんぐあくーこいうまれに
僅一こるのうち人馬など遅くいくるのけんやあーくはさ
そわるのうちそれぞれ新年までもそれぞれのうちうち
りなくーこいるぬうたりのあれなどたりてもんづるのや
いふあう行ごりの能もなそれどのうのけ勝力ひとんとた
のもたものみてるのもけつのて旅人やりみうこの
めうちうちにこうげうらもこうぢにてなつのう香ちくけ
やうこうたうえも答でやこあるどうれうこんまして病
などに祝されいうづきこうもたに部ろけるどんあうこう人
けんなくてるぶのうこうかるる一ほうこうあれもまれるんぬ

する一ちうた馬場のの服ぐろうたるちうぬ毎たるかこうけ
ぐふまのの服ぐろうたるにちきぐんとうまくたるもう
ここーこれぐたちうこと考こうこうぐなでこうぐきこて主まのう
づいうちうこもけまーくいてくこうけのうこうけのうこうぐい紙さく
んこうこうこうりこうこうもけ炎などでのくこと考こうこうてあくなき
ちこうこうこでもなるべけ神つこう冠つこう業まもうこうぐーぞで
やーかこうよりて裏人ワこいわまこけこうこうものうまでんこと
こまーこうこうこいうこうぐをけうぐこうこのこうをけうぐけうり
するうこなどのこうけけりまの安くちうんとて千里の旅よ
みのけこうけこうこうけこうこうこうこうこうこうこうこうこうぬ
けけのこうこーこうこうこうぐこうぐこーこ偽ぐこうこけこけこうこうこけこ
ふこうこうぐーこうきは主こうこうこうこけこうこうこけこうこけこうこけこ

おぼえなくはあらじ燈火のともされてうちめぐりたる
なんとしても隠れぐるしくなりしよその人の見られぬよう
つゝましく侍りしとぞ
○更級日記にかつらきの関といふ所のほとりを行
ふにたかの川といふ所をむかふの日記作りしを
所とさだむるの中のかたておもひいたることは在五中将乃
いたらくなんとも手なるゆえなりし中将の集にはたゞけ
やあり舟にて渡りあはれでもたゞ其乃国にあり未だ
あるも此所を不審とす契沖の勢語臆断加茂氏の
古意二部は伊勢 あづまの行し なども論ずるよりさらに此
ごろ江戸乃橋千蔭のうたおものはなしありといひこ
所ありし此所古本をえらん校合をしたる今本某の錯乱とて

古本にはむかしかつしかの国なるといへりさぞとも
あるはとかくもおぼつかなしそれは甚だ違へるを今も
村といふをなもありもとてまたむかしたゞその国なるはかつらの川
といふ足は今の馬入(バニウ)なるべしとありまた後文此なるをう
つしかくされて家藏せる本は今乃川筋りへあるで別れ
たるに隅田川といふはありそくたる梅若の塚などもあり
もろもろ人の話なれどもこれはうたがはしくてこくのたへなるた
をいふことも弁ずべからず次にむかし記せる八橋の説なども紀伊
○西宮より灘路乃上に道するに菟原(ウバラ)住吉ありしが
有やまちの処しといふ説あれどもたしかなる證なし
中古以後にいふも東西も今の所なるは明白と世に
是非を考得る人もやあるらんと云ふ次

○紀州の士金玄正陳とこゝろ人のうける熊野の道
記をこゝろふ所戸浦の内より行ところ小入江あり先
年国君船こゝに寄給ひ民家唯一軒あり新
子三人居りしを序流あり駒木根八郎正次とゝ
何をいとなみこゝに過ぎ国をも作りほとに弱ね
しらべ初めてとゝわるとゝ次まち序意より行ものを
へくものちとまりふかに居りとゝ網をひきれ竹
ちいやちくいとまを付ぐしわきう次やうとゝ高浜第
ヤ付くこのへとらせ序ゝ序ゝ駒木根うれこを
けるこひしふ浦を過てに家あまりに第へ一つの浦
ふたり名是ひとへ弱木根が居りとて弱木根八
郎明神とゝひころ社を建其所の氏神とゝうね





まゝとなり是正次いまゝ生存の日ちのまゝ生れ
紀ゝり行ちよ者ものゝ善政をおどくしなる
良妻を墓ひゝ生初を建ゝこれを建ゝこるる
みゝいゝゝきゝけ世一ちをなる新八郎こ
の朱陳村ふ似ゝり
○備中国ふ沙蘇浦とゝは遠地ゝ流風をゝ沢
深林を守りもゝ村中物を争ひ利欲貪ゝ
をゝ沢礼節ゝゝ正ゝく其村長乃ゝ春帝
の慶儀に切ゝ老若沢家を紀ゝ門のゝゝ
ゝゝゝとめゝて一人ゝれをのゝゝゝうけと
をゝ一ゝを西山拙齋を明ゝゝれゝ梅の花ゝに遊
ひゝゝ此村のゝゝ海ゝを生て住ゝゝゝふ家ふ別

世界のこゝちせらるゝ沙美の歌古詩の体なりとつゝまを作りて
稱せられう其歌縣令某国をめぐり巡村のほいに
に檢(ケミ)せらるゝふ違(タカ)いざりしらべつゝふと聽り達し賣と
しく許多の根を賜つゝふ歌を是をとりて用水の池
をほりて田園の益とし即惠池となつく拙齋又碑
文を著しく碑を建つゝそ石摺をも贈られて花石
○清流州繪嶋に出る石白くしく人物花鳥恰も
肥(ヒ)るゝごとし自然の物ふりと洲中山田浦本間小
無つ石亨老人こゝりせつる古人も此石をとゝ賞しさ
繪嶋と号られしやあん石よりて石乃生ずべきふ
はあらべむしら清流と号をこそわべとゝ洲をて記を
○清流より出る理木い全く黒檀(タン)のごとく木理(キリメ)うつくし

黒色のやうふ人も凡状奈(ナシ)本ゝ類を須本(スモト)より出ると
名ゝ人の国楽りてふきゝも得ざるを予嘗人より多
に作りゝると与へこゝ人をせりけるそ人のかゝに
ゝるもこゝ事うゝめるうゝ
○清流州肥(ヒナ)と称ふ生(オヒ)つゝ木中々も杉ゝん
貴ゝ不思議のゝ人ゝまゝ国国より三ばゝけとゝふの
をゝぶ沢水遠ゝ生ゝ中ゝ廣堂(ヒロタ)に数(ヒヒ)ゝ多ゝ弁品ゝ
三ゝ沢ゝいとゝぶゝるゝいふ俗称ゝ花瓶ゝ作ゝるゝを羽石乃
人おゝゝゝゝ
○顕昭法師の袖中抄の日本国の一説ふ石
近江馬場の南湖院より東に川入る所ゝ今要ゝ
一説西湖院ゝ云ゝ此ゝ中男湖流ゝ

て東は人の家を引われて遠くて一定地隨身
奏筆成で家はうれるよりわれを入への府とよりあり
国田桜さうふ今入江屋とやうに沢尼御所ありも
同じ意に家い右仮名いへ今仮名いうくいいふ
を祭りまうしに沢沼中に入江の名義名滝ぐ
きふはまてわるひうれるうり
○去う寛政のまつぐろ湖水の北下モ八本演といふ所
みうやー廣ふ同水氣通ぐくうりー鯉鮒の類
をはじめ雑魚も醉うぐくうりく張陰にれり
海へうれをうんうて水ふるりーが沿うりうと氷の
おうくふうまづくも跡をうぐうちぐくそもいうねど懸
もうく遠に家ふ登りしうて右老百年ふうもりう



うとあうーこ国ううとうり地沿氣うて魚も半死半
生に跡ーしなんあやーさうとうを遠のくううり
○ううひのうう備中玉島ーいふ一説鞆浦うもう云
玉島の形ちうち魔(モノノイ)の影ふ行うりとうの人いうり
但ー鞆ノ浦い茅葉集うも出て古うり鞆ノ名ー
玉島の名も弘安年中の古記ー文其所の寺ふ有りと
いへばうういいづるに別名うやー尋ねべし
○あううの海ノ入うふうくて入魚とうるいむしは
うり三里餘ふふ西あだあうり倉浦というに沢あう所
ひうとうれ東あうーしあうのうり濁りうーいたうくいうる
をのうこうていたうて習ふむうーい此邊うう鯛を漢(スナドリ)
しづ今は魚あううもに陸るうりて鯛は玉島の一

里水神水神といふ所にて専渓寺を水神綱とて
甚貴ものなり

○北野天満宮二月廿八日の神供を菜種の御供と
いふは詳なる梅の御供と甚切なる稲ふ仏を
高盛にして神前に備へ八脚机の下へ備へ其机
のうへに香をたて榊にて小土器に白紙をひねし
三杯の米を満てうへに梅の小枝をたてまる或
は花なりなる枝を切て挿(サス)或は男女共右二十三是男女の
厄のうれひなる故にふうつり初てこうるる故も
なれども是西京の神人より来る也即神人の霊
の話なり

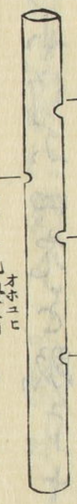
○幸若の文月廿日の夕陽明家より内へ
せたまふ花房といふものあり御使い白ひといふ
さものゆへ白書の内侍の御所へ御ふみより長橋へ
すてまわる所なれ共其ものゆへ衣紙(キヌガミ)ゆへ
詠をとられるゆへ大傘をかりてとぐるい
又箱を持(サ)へ下部なりより従りてなりの此大傘一
人い花房をもつ此下部も又朝と行ふ所此日の
名はなりより来れりとて内へ小御所の此ま
へ乃御供ようへ二星の御を向にて行なん
こうれもこのゆへなりけるといひぐるる
出なりなり源氏解由判官西さて賜まる
○皆川淇園話云河水濁(アワ)ることい表(ウハ)い順行し夜

は逆流を行をわろき人ふいふべからずと奥島氏風ふ逆
ひ水に逆ひさゝ毛も鮮も順ふなるゆゑふ逆浪を
ふむび逆水に行く又満水のは大石をも水に流ぐ行ある
あり其ゆゑは水波ハ砂を穿て石は動ざるものゆゑ
砂の穿ちたる所へ落返り隠しとこへ行し人のいつら
むとうきん心得べきことなれバきく所ふ録せり
○橋經亮ぬる粟田氏ハ年ごろ九月十五日なりしが
天明六年ハ國恤（停御停止にいりけるを削られたり）のゆゑ祭月ふ
延引せり此祭式の内知恩院裏門前の上に白川の
流に掛し獨木橋を重に叡辞にしいわるゝとなり
其夕へ霜深くあまりにてぶ細き橋のいとあやうきを
といふと人ゝおりくるに其河涯を行る明田利右衛門と



いふ申楽の笛師なるを得て木屑を敷せしかば障な
く渡りわたりけるされど時に當ての働なりと人々
感じあへりはるか昔に鎌倉にて中書王の御鞠行
はせし時地の湿りければ木屑を敷かりしを人の褒
られば乾きたるや有けんと嘲られしあとにしる
にあはせて此橋にては木屑なくては用をな
さゞりぬべきことは遠くして許せり
○去年飛驒高山田中生のもとよりいひこせし其國
人宜遍齋春山といふ人一竹數律といふものを作る唯一
節の小竹に四穴を鑿り十二律をなすのみ其法左
手の指をもて四穴をふさぎ右の大指の爪をもて
下の節を打ちに彼左手の指を用ゆとかくべきをもて

## 其律呂の図其図四孔用用の法如左

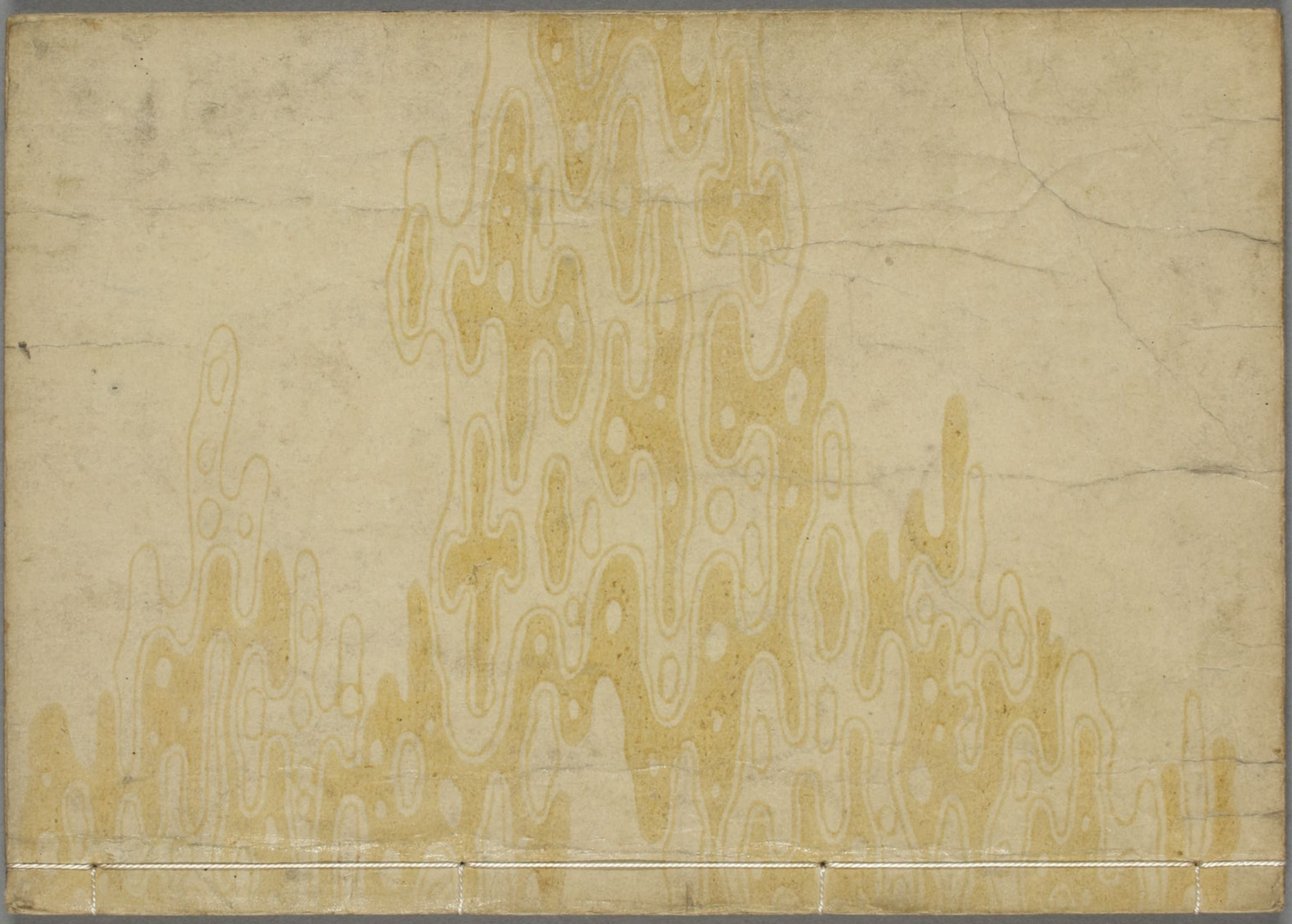



壹越●●●●四穴皆閉　斷金●○○○第一半開
平調○●●●第一全開　勝絶●○●●第二開
下無○○●●第一二開　雙調●●○●第三開
皂鍾●●○●第一三開　黄鐘●●●○第四開
鸞鏡○●●○第一四開　盤渉●○●○第二四開
神仙●●○○第三四開　上無○●○●第一三開

巻の中に律に巻きし人故ここに立ちまして絶わるとも
しばらくとどまりさしばし弁乃ちこれ細さも其真物



とてこれに辨べくばいとも下ばくるるこれを
なれどのことり記し絶えわまを写し
○河内国弱ゴ谷金剛福寺の僧一絃の須磨琴と
いふものを弘めしふ其図まる譜ふ寺も板琴知要と
いふ冊子を印行しまし世公にそれば再びこれは
いとば弾法を伝へしくもこれうとあり行年々
次ぐ伝えしくのはもてと屋まんとて造ふ行と
いとばしることもものにしるふいそ何よまれ一無ある
ことにいつるし昇平の御代又雅盛をわばうあう
の事ともそこ手出とくに人ともあ次人ともあること一
思は明楽（ミンガク）といふものたに行る長崎巨鹿（オホガ）氏京ふ登
ことて伝へし是も貴の明楽ふいあふ次長崎の

頭「すしたるどうしたりにて貴方へ〳〵とまれ
さうふを敷ふくんをきこんで四十三文唐ぢり乃約
束にのつとうて迎年は國学を習へとこさりな
きばすると一升數律も須磨琴も時を得らるべし

岡田沢筆巻之二終